

今週のメニュー

■ [トピックス](#)

◇日化協主催の教員向けセミナーに協力

■ [随想](#)

◇日本のお祭りシリーズ（その7） ー高柳「きつねの夜祭り」ー

関東学院大学 織 朱實

■ [編集後記](#)

■ トピックス

◇日化協主催の教員向けセミナーに協力

塩ビ工業・環境協会（VEC）では、昨年から「プラスチック」が中学校理科カリキュラムに導入されたのを機に、日化協、プラスチック工業連盟、プラスチック循環利用協会と連携し、「プラスチック教育連絡会」を組織し、プラスチック授業に役立てていただきたく出前授業等の活動を行っています。一方、一般社団法人日本化学工業協会（日化協）は、化学の産業界と学界が連携して、化学の啓発と化学産業の社会への貢献の理解促進を目的とした「夢・化学-21」キャンペーン事業を展開しており、その一環として、昨年から新たに、小中学校・高等学校の先生方を対象としたセミナー「新しい理科カリキュラムに対応した授業法」を取り組み始めました。

先週の日曜日（10月20日）、盛岡の“イオンモール盛岡”で盛岡市教育委員会や経産省等の後援をいただいて開催された日化協主催の教員向けセミナー「新しい理科カリキュラムに対応した教授法」に、プラスチック教育連絡会の一員としてVECも協力しました。

プログラムは、まず、「イオンを粒子として捉える指導の工夫」と題して、中学生に物質は粒子でできていることをつかんでもらうための実験について、東京都品川区立小中一環校八潮学園の牧野順子副校長の講演と、「新学習指導要領（化学基礎と化学）の展開と課題」と題して、学校で行っている実験を紹介したり、メディア教材をふんだんに使いながらその活用について、東京学芸大学附属高等学校の岩藤英司教諭からそれぞれ講演が行われました。

3つ目のプログラムとして、「身の回りのプラスチックをもっとよく知ろう！」というタイトルで、一般社団法人プラスチック循環利用協会と共同で、2時間の枠で講義を行いました。VECの紹介内容は、プラスチックの基礎知識に関する解説と中学一年生を対象とした出前授業を体験していただき、プラスチック循環利用協会はプラスチックのリサイクルに関する取り組みやリサイクルに関連した実験などを紹介しました。



セミナー風景

当日はあいにくの雨でしたが、盛岡市内ばかりではなく、近隣地域の小中・高等学校の先生や教育委員会の方々の参加をいただき、また、地元メディアの取材もありました。

講義中のコメントや実験中に気づいたことなどを配布資料やノートに書き込んだり、予定時間をオーバーしての講演終了後も、帰路を急ぐことなく、実験の道具の作り方や実験のポイントなどについて、熱心に質問を投げかけられる姿が印象的でした。また、実験に使ったプラスチックのサンプルが欲しいとか、出席できなかった先生にあげるためと資料を余分に持ち帰る先生もいらっしゃるなど、いつもながら教育現場に携わる先生方の熱心が伝わってきました。ご参加の先生方からは、「有意義な一日でした」、「また、開催してください」と声をかけていただいたり、「早速プラスチックの授業に取り入れたいと思います」と感想を述べられる中学校の先生もおられ、プラスチックに対する興味や正しい知識が、教育の現場に広がって行くという実感が持てました。



真剣なまなざしで実験中の先生

日化協では、来年1月にも神戸で同様なセミナーを計画しています。先生方との新しいつながりを楽しみにしながら、プラスチック教育連絡会の一員として、応援していきたいと思っています。

■ 随想

◇日本のお祭りシリーズ（その7） ー高柳「きつねの夜祭り」ー

関東学院大学 織 朱實

ご縁があって、柏崎でお仕事。柏崎の高柳町では、きつねの夜祭りという民話のような、まるでジブリの世界！というお祭りがありました。柏崎の高柳町は、山間の棚田がとても綺麗なエリアなのですが、この山道を夜狐の装束をきて、灯籠をもってゆっくりと栃ヶ原地区から漆間地区まで、横笛に曳かれて歩いていくというお祭りです。

なぜ、「きつね？」というのはこのエリアにある「藤五郎きつね」伝説がベースになっているとのこと。藤五郎きつねのお話自体は、昔村の人を困らせていた狐が藤五郎にやっつけられました。それを、恨みに思った狐が藤五郎の家に呪いをかけて、豊かだった藤五郎の家が没落しました。というちょっと身もふたもないお話なのですが（笑）夜の山間を狐たちが練り歩くお祭りは、とても幻想的で、素敵でした。





まずは、神社で畳一畳分の大きなお揚げが揚げられます。白装束の村人の手で、お供えされ、そのあとお祓い。このときの詔が、お祭りの由来、長くみんなの努力で続いてきた豊作祈願のお祭りなので、今年も滞りなく行えますように、といういわれや経緯もわかるすぐれもの。観光客(といっても、今まで見てきたお祭りの中では少ないほう。それもまた地元のお祭り！という感じでよかったです)にも振る舞

い酒。そろそろ夕闇が迫ってくるな、という中で、村の子どもや大人たちは神社の後ろで、白装束に狐のお面といういでたちに着替え、横笛と踊る狐に先導されながら3 kmの行程へ出発！見学者も、灯笼を持って行列の末尾に加わります。「きつねの夜祭り」の素晴らしいところは、すべて村の人たちのお手製！というところ。きつねの絵が描かれた可愛い灯笼もイモ判でみんなお手製ということです（毎年、こわれた灯笼を修理して使っているとのこと）。道々に立てられている「きつねの夜祭り」の赤いのぼりも、墨絵風のポスターも、スタッフの人の背中にきつねが粹な赤いTシャツ（これが、とても可愛いので売ればいいのに～と思ったのですが）もみんな手作り。



3 kmの山道も、普段は使わない道で事故が起こらないように綺麗に整備され、雰囲気盛り上げるために、ゴール近くにはいくつも灯笼が飾られていたりします。

この山道は、「懐中電灯はつけないでください！」「カメラは、危ないから禁止」というスタッフさんのしっかりした誘導のもとで雰囲気を損なうことなく進んでいきます。都会だったら、「危ないから」という理由で、山道は歩かせない、ということになってしまいそうですが、本当に真っ暗な中、結構急な坂もある細い道をしずしずと進んでいくのです。山間のお祭りだなと、思うのは都会ならどこかで光が見えてくるものですが、深い木立の中は、本当に真っ暗！月明かりと灯笼の光だけが、頼りです。



3 kmを、ゆっくり1時間30分かけて歩いていくので、灯笼をもっている地元の人たちのおしゃべりも楽しめます。途中休憩では、地元の淡麗な日本酒「姫の井」も振る舞われ、まさに参加型のお祭りです。中学生狐は、行列の先頭やしんがり、お揚げ運びと大活躍。小学校のとき「調べもの学習」で地元のお祭りということで調べ、そこからお手伝いするようになったとのこと。物品搬入や誘導、灯笼もちなどみんな観光客への受け答えもしっかりしていて感心します。子ぎつねたちも山道を頑張って歩きとおしました。



さて、ゴール間際には、ちょっとしたびっくりが！山間に灯りがふらふら揺れていて、「狐火？」「人魂？」とどよめきが起こりましたが、スタッフさんが竿の先に灯笼をぶら下げ、ゆっくりと振りながら雰囲気をもりあげてくれていたのです。ゴールでは、中学生たちによって運ばれたおあげが切り分けられ、みんなに配られました。羽織袴の長老狐（地区会長さん）が、祠にお参りして「今年も豊作でしょう」というお

きつね様のお言葉を無事にいただきました」とのご報告。拍手喝采。

こんなのんびりしたお祭りになるまでは、カメラマンのマナーの悪さと戦うといった経緯もあったそうです。そもそもが、1985年の国勢調査の結果、高柳町が新潟県で人口の減少率が最も高い町となってしまったことに危機感を抱いた有志の若者が始めた取り組みの一つの「きつねの夜祭り」。県の写真コンテストで紹介されたことから、急にカメラマンが増え、それに伴いフラッシュやライトをつけたり、脚立を持ち込んだり、カメラマン同士のけんか等マナーの悪いカメラマンも多数あらわれ、そうしたカメラマンを排除するなどの苦勞をしながら、今の形になったそうです。

最後の長老狐さんの挨拶は、「村は65戸、今日はその何倍の人があつまってくれ、村で一番のにぎわいになりました。有難うございました。どうぞ楽しんでってください」という心温まるものでした。新潟、今まであまりご縁がなかったのですが、これを機会にまだまだ面白いところやイベントもありそうなので探索してみたいな、と思いました。

幻想的な「きつねの夜祭り」の写真は、ブログでもアップしているので是非大きな写真で見てください。

⇒ [ブログはこちらです。](#)

⇒ [メルマガ・バックナンバー](#)



■ 編集後記

今回で40回目の編集後記になります。ペンネーム「円行」は塩ビの「エン」と塩ビ産業のサプライチェーンやライフサイクルをイメージした「円」、結果よりもプロセスを大切にしたいと思い「行」を選びました。これからも人と人との「縁」をつなぎ、その取り組みを紹介する「メルマガ」にして行きたいと願っています。（円行）

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp
